

VI 動物編

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

昆虫類

クモ・多足類

陸産・淡水産貝類

淡水産無脊椎動物

海洋動物

VI 動物編

1. 哺乳類

(1) 調査概要

1) 調査方法

これまでに熊本県内で確認されている野生の陸生哺乳類は以下の7目19科49種である(『くまもとの哺乳類』、熊本野生生物研究会2015)。ニホンザル・ニホンリス・クリハラリス・ムササビ・ニホンモモンガ・ヤマネ・スミスネズミ・ハタネズミ・アカネズミ・ヒメネズミ・カヤネズミ・ハツカネズミ・クマネズミ・ドブネズミ・ヌートリア・ニホンノウサギ・アナウサギ・ニホンジネズミ・カワネズミ・ヒメヒミズ・ヒミズ・コウベモグラ・コキクガシラコウモリ・キクガシラコウモリ・オヒキコウモリ・ヤマコウモリ・アブラコウモリ・ヒナコウモリ・モモジロコウモリ・ノレンコウモリ・クロホオヒゲコウモリ・ユビナガコウモリ・テングコウモリ・コテングコウモリ・イエネコ・オオカミ・イヌ・タヌキ・アカギツネ・ツキノワグマ・ニホンカワウソ・ニホンテン・アナグマ・ニホンイタチ・シベリアイタチ・アライグマ・イノシシ・ニホンジカ・ニホンカモシカ。これらの中から外来種やペット由来種であるクリハラリスやヌートリア、アナウサギ、イエネコ、イヌ、アライグマを除く43種を評価した。熊本県のR L2014発行以降に実施した主な補完調査の対象種はR L2014に掲載された24種である。また、隣県で近年生息が確認されたニホンノウサギコウモリの情報収集にも努めた。

① 樹上性小型哺乳類生息調査

巣箱自動撮影調査を実施した。樹木の幹に巣箱を設置し、それに向けて自動撮影カメラを設置するという方法である。主な対象はヤマネとニホンモモンガである。調査地は宇城市西山峠・美里町白石野・宇城市観音寺・小国町上田・南小国町満願寺などである。

② コウモリ生息確認調査

洞穴性コウモリ類の調査を実施しながらも、森林性コウモリの調査にも力を注いでいる。調査は洞窟(球磨村大瀬洞・五木村吐合洞・同九折瀬洞・御船町風神洞・宇城市新地の穴・熊本市天狗山洞窟など)や隧道(山都町内大臣)、水路隧道(菊池市重味)、地下戦跡(錦町木上)などで捕獲や目視調査を行った。また、樹上性小型哺乳類生息調査にあわせてコテングコウモリ確認用トラップを設置した。熊本城天守閣付近を飛翔するコウモリやJR線(在来線や新幹線)高架の隙間をねぐらとするコウモリの音声確認や目視の調査、捕獲調査も実施している。

③ ニホンカモシカ自動撮影調査

ニホンカモシカは生息数が急激に減少しているため、目視はもちろん糞塊による生息確認が困難になっている。そこで、自動撮影カメラを用いた調査を実施した。調査地は高森町下切・同川走川・同高尾野・同八津田・同清栄山・南阿蘇村阿蘇外輪山内壁・山都町内大臣・美里町柏川葛之尾・八代市泉町葉木などである。

④ 他の該当種も含め、文献や聞き取りなどの情報収集に努めた。特に今回は国土交通省が実施している河川水辺の国勢調査、県が実施する開発事業等に伴う環境アセスメント調査のデータを入手した。

2) 調査結果の概要

① 樹上性小型哺乳類生息調査

美里町白石野においてヤマネの生息が確認された。当地は九州中央山地から延びる山塊の末端部に位置し、二次林やスギ植林、果樹園、農地、民家がモザイク状に配置された地域である。確認された場所は標高約 270m で周辺をスギ植林に囲まれた狭い二次林である。宇城市西山峠や宇城市観音寺の調査地では確認されなかった。これらの調査地は成長した二次林が広がっているが、九州中央山地から続く近隣の森林とは連続していない。また、小国町上田や南小国町満願寺の調査地でも確認できなかった。これらの調査地は河川沿いに二次林がまとまって生育しているが、周辺は草原や農地に囲まれている。これらのことから、ヤマネの分布は主要生息地である九州中央山地と連続した森林の存在が重要であると推測される。これらの要件を満たせば周囲をスギ植林で囲まれた小面積の二次林でも生息している可能性は高く、要件を満たしていないなら発達した二次林でも生息していない可能性が高い。

ニホンモモンガはいずれの調査地でも確認されなかった。これまでの調査では九州中央山地と連続し、かつ自然度の高い森林がまとまって生育している地域のみで確認されており、ヤマネよりも分布域は限られる。

ムササビは調査をした地域の多くで生息が確認されている。森林が広がる地域のみならず老齢木が生育している鎮守の森などには、都市近郊から奥山まで広く分布している。

② コウモリ生息調査

コテングコウモリ用トラップによる本種の確認は、生息の有無をかなり正確に反映する。巣箱自動撮影調査にあわせてトラップを仕掛けたが、宇城市西山峠・美里町白石野・宇城市観音寺・小国町上田・南小国町満願寺のいずれでも本種の生息は確認できなかった。あさぎり町白髪岳や五木村、山都町内大臣ではトラップ内で確認された。

洞窟や隧道の調査ではコキクガシラコウモリやキクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、ノレンコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリが確認された。球磨村大瀬洞はユビナガコウモリの 1~2 万頭の集団越冬が毎年確認されている。五木村吐合洞では冬期にモモジロコウモリやテングコウモリなど、同九折瀬洞では初夏にコキクガシラコウモリやユビナガコウモリなど、御船町風神洞では冬期にコキクガシラコウモリやユビナガコウモリ、テングコウモリなどが、山都町内大臣林道の隧道ではモモジロコウモリやノレンコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、テングコウモリなどが確認されている。また、宇城市新地の穴はユビナガコウモリの、熊本市天狗山洞窟ではノレンコウモリの出産保育洞として重要である。

古川兵戸井手は、菊池市重味の古川地区で菊池川から取水されている江戸時代に作られた農業用水路である。水路の途中には多くの隧道があるが、取水口に一番近い 1 号トンネルでキクガシラコウモリやモモジロコウモリ、ノレンコウモリ、ユビナガコウモリの生息が確認された。特にユビナガコウモリは 7 月に数千~1 万頭の出産保育集団が形成される。これは熊本県では最大、九州内でも有数の繁殖地である。2012 年ごろ、1 号トンネルを含む複数の隧道は老朽化のために全面改修が計画された。その後の調査でコウモリ類にとって重要な生息地であることが工事関係者に理解され、2017 年にコウモリが利用する隧道は天井部に手を加えない工法とすること、かつ工期はコウモリの利用が少ない時期のみと決定された。隧道の工事はこれからであるが、今後も引き続き調査を実施する。

さらに、熊本城天守閣周辺を飛翔するオヒキコウモリは、季節によって出現頻度に違いがあるものの年間を通してその音声記録された。また、2016 年 4 月の熊本地震で石

垣や天守閣に大きな被害が出たが、地震後も本種の音声や姿は記録されており、引き続き生息が確認されている。ただ、石垣修復工事の進捗が本種のねぐらに影響する可能性もあり、留意が必要である。なお、八代市近郊の新幹線高架の隙間において本種の生息が確認され、現在他の地域における新幹線高架でも調査を進めている。また、他県ではヤマコウモリやヒナコウモリが新幹線高架をねぐらとしている例が報告されており、熊本県でも確認される可能性がある。近年大分県で生息が確認されたニホンウサギコウモリの生息情報は、熊本県内ではいまだ得られていない。

③ ニホンカモシカ自動撮影調査

低山から高山まで広い範囲で増加しているニホンジカの影響で、ニホンカモシカの生息状況が大きく変化した。奥山での生息密度が大幅に減少し、人里に近い地域からの目撃情報が増えている。2011・12年の九州地区ニホンカモシカ特別調査では九州内で約800頭、熊本県内で約50頭と見積もられており、絶滅のおそれが高くなっている。従来、ニホンカモシカ生息の把握には糞塊法が用いられてきたが、この方法は極端な低密度では適用が困難である。そこで、目撃情報が寄せられた地域において、確実な生息の確認が可能な自動撮影カメラ調査を実施した。2011年から県内で試行が始まり、これまでの調査では本種が撮影されていることから調査法として有効であると判断できた。しかし、いずれの地点でもニホンカモシカの撮影頻度はニホンジカやイノシシ等に比べて極端に低く、ニホンカモシカの生息密度の低さが示唆される。

2013年から実施している高森町下切では継続的に撮影され、死亡個体も見つかった。高森町川走川や同高尾野、同清栄山、南阿蘇村清水峠近辺でも自動撮影カメラで撮影されている。これらの地域の西方に位置し、分布拡大の最前線である南阿蘇村阿蘇外輪山内壁の南阿蘇村駒返峠、同地震ヶ岩、西原村十文字峠では目撃情報等を参考にカメラ調査を実施したが撮影されていない。死亡個体が得られた美里町柏川葛之尾では撮影されず、以前は生息密度が高かった山都町内大臣では頻度は低いものの撮影されている。なお、地震ヶ岩調査地のカメラは熊本地震とその後の豪雨による土砂崩れで流され、4ヶ月間のデータのみで終了した。

④ 既存資料調査

熊本県の一級河川を管理する国土交通省が実施した「河川水辺の国勢調査」、及び熊本県環境影響評価条例に基づいたアセスメントの結果を閲覧した。県RDB対象種のニホンジネズミやカワネズミ、コキクガシラコウモリ、ユビナガコウモリ、モモジロコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリ、ムササビ、スミスネズミ、ハタネズミ、カヤネズミなどの情報が得られた。また、特定外来生物のアライグマの生息情報が松原・下釜ダム周辺から得られた。

3) R L 2014 との比較

産業構造の変化や林業不振は農山村の高齢化や過疎化を招き、中山間地域の活力の衰退が進んでいる。このことが里山や草原、人工林の荒廃につながっている。また、ニホンジカ個体群の増大は過剰な採食により林床植生の大規模な消失を引き起こし、森林生態系の不可逆的な変化が進んでいる。これらは、各哺乳類のハビタットにも大きな変化をもたらしている。さらに、特定外来生物のアライグマは隣県での生息域拡大による県北部への侵入や県中部での生息情報の増加など、状態が悪化している。なお、宇土半島に定着していた特定外来生物クリハラリスは根絶に向けた対策が功を奏し、生息数は激減した。

今回、評価対象となった陸生哺乳類 43 種のうち、24 種を熊本県における絶滅のおそれのある野生動植物、及び付属資料の該当動物として選定し、カテゴリー区分をした。

- ① 絶滅(E X)には引き続きオオカミとツキノワグマ、ニホンカワウソを選定した。
- ② 野生絶滅(E W)には該当種はなかった。
- ③ 絶滅危惧 I A類(C R)には引き続きヒメヒメズとクロホオヒゲコウモリ、ニホンカモシカを選定した。
- ④ 絶滅危惧 I B類(E N)には引き続きニホンモモンガとオヒキコウモリ、ノレンコウモリを選定した。
- ⑤ 絶滅危惧 II類(V U)には引き続きテングコウモリ、コテングコウモリを選定した。また、新たにニホンイタチをNT からランクを変えて選定した。
- ⑥ 準絶滅危惧(N T)には引き続きムササビとカヤネズミ、カワネズミとコキクガシラコウモリ、モモジロコウモリを選定した。また、新たにヤマネをV Uから、ユビナガコウモリをANからランクを変えて選定した。
- ⑦ 情報不足(D D)には引き続きヒナコウモリを選定した。また、新たにヤマコウモリをV Uからランクを変えて選定した。
- ⑧ 絶滅のおそれのある地域個体群(L P)には該当種はなかった。
- ⑨ 要注目種(A N)には引き続きスミスネズミとハタネズミ、ニホンジネズミを選定した。

4) 今後の課題

RDB1998 発行後、県内における哺乳類相の解明のために補完調査を継続して実施してきた。それにより生息状況が明らかになってきた種の中には、保護対策が急がれる種もある。また、現段階においても生息状況の把握が困難な種もあり、以下の課題が残されている。

- ① ニホンカモシカは増加したニホンジカとの餌資源をめぐる競合等を受けて激減し、絶滅の危機が増大している。今後の継続的な分布調査とともに絶滅を回避するための積極的な保護対策が緊急に必要である。
- ② ヤマネとニホンモモンガは小型で夜行性であることからその姿を見る機会は少なく、現在最も有効なのは巣箱自動撮影調査である。この方法によって生息状況が徐々に明らかになってきた。県内における分布の規定要因を明らかにすることが課題で、今後も調査を重ねる必要がある。
- ③ 約 13 年前の全県的なロードキル個体の調査の結果、ニホンイタチは分布している地域に限られ、外来生物のシベリアイタチは全県的に生息域が拡大していた。その傾向は現在も続いていると思われるが、映像での区別は困難なため、捕獲や死体拾得による判別となる。早期に分布の把握が必要である。
- ④ 近年発見されたユビナガコウモリとノレンコウモリの繁殖洞のうち、防空壕や隧道は人の手によって環境を改変される可能性が高く、保全が必要である。
- ⑤ 近年の情報が得られていないヒナコウモリやヤマコウモリ、情報が少ないクロホオヒゲコウモリやオヒキコウモリ、熊本県ではまだ生息情報が得られていないが隣県で近年生息が確認されたニホンウサギコウモリについては今後も調査努力を継続し、生息情報を蓄積する必要がある。
- ⑥ 熊本城天守閣周辺で活動するオヒキコウモリは、城の石垣をめぐらにする可能性が高い。2016 年の熊本地震による石垣崩壊後も生息が確認されているが、その後の天守閣や

石垣の復旧工事が本種の存続に影響を与える可能性があり、留意が必要である。

- ⑦ ヒメヒミズについては、分布と生息数の把握のため、九州中央山地と祖母傾山系での調査を継続する必要がある。
- ⑧ ムササビは里山を代表する哺乳類であるが、生息地の分断で遺伝的な孤立が懸念されている。本種の生息にはねぐらとなる樹洞が必要で、そのような木が育つ森林の広がり確保したり、コリドーによって社寺林や屋敷林、里山の連続性を向上させたりすることが重要である。このような視点に立った分布調査とハビタット保全活動を、熊本市を中心に今後も継続する。
- ⑨ ニホンリスは 1994 年に狩猟鳥獣から除外されたが、それまでの狩猟報告にはリス類の記録が掲載されている。しかし、ニホンモンガやヤマネ、外来生物のクリハラリスが誤認されている可能性があり、ニホンリスの生息を示す信頼できる情報とは言えない。また、これまでの補完調査で捕獲や目撃等が全くない。したがって、現段階ではニホンリスが生息している（した）事を示す確かな証拠は得られていない。つまり、どのカテゴリー区分にも指定できないため「保留」として取り扱う。
- ⑩ 県下の神社などには、ニホンカワウソの前肢が「カップ」の手と称して保管されている可能性があり、その情報を確認する必要がある。
- ⑪ 外来生物の情報収集と対策も重要である。特定外来生物であるクリハラリスは 2008 年に宇城市で野生化個体群が発見されたが、その後の対策が功を奏して駆除が進んでいる。今後も引き続き根絶を目標とした対策を続ける必要がある。また、アライグマは隣県で分布を拡げて県北地域への侵入が目立つようになるとともに、熊本市南部や宇城市・宇土市・御船町等での情報が増えている。担当行政による情報共有システムが構築されたが、有効かつ強力な対策に力を注ぐ必要がある。ニホンイタチを駆逐し続けているシベリアイタチについても情報収集と対策の構築が望まれる。ハクビシンは確実な生息情報が未だ得られていない。
- ⑫ 開発事業等で実施される各種の環境アセスメントの情報を極力入手し、評価に必要な基礎データとする。

(2) 種の解説

哺乳類は県内を6つのブロックに分けて各種の生息確認状況を示す。RDB1998では一覧表で、RDB2009では種別に文章で示した。その後、調査結果は徐々に集積されているが、いまだにブロック別の評価は困難であり、今回も各ブロックにおける生息確認の有無を文章で示した。以下、各ブロックの範囲を示す。

菊池・阿蘇：山鹿市東部、菊池市、合志市、菊池郡、阿蘇市、阿蘇郡、上益城郡北部

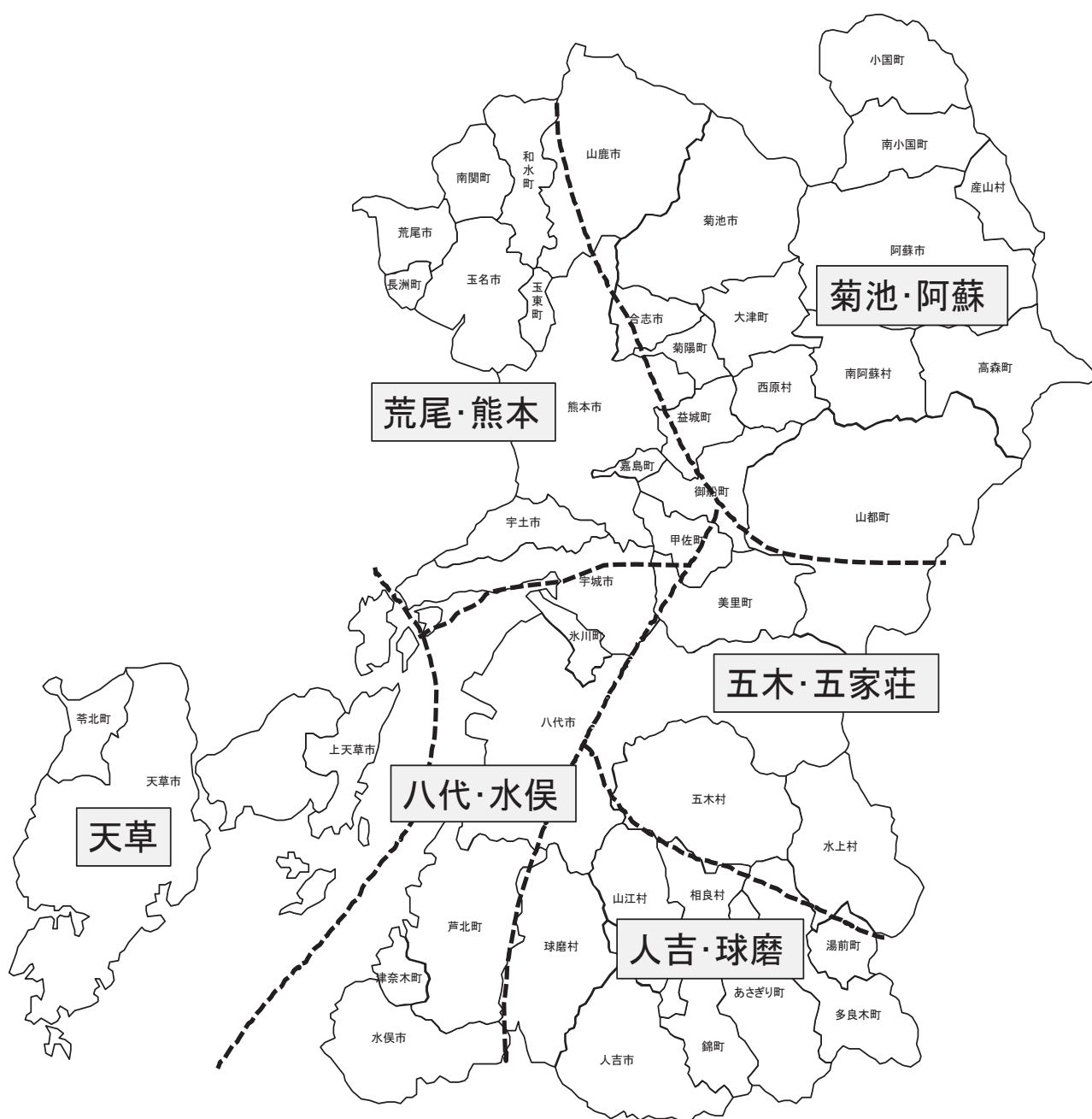
五木・五家荘：上益城郡南部、下益城郡、八代市東部、五木村、水上村

人吉・球磨：八代市南部、人吉市、球磨郡（五木村・水上村を除く）

荒尾・熊本：荒尾市、玉名市、玉名郡、山鹿市西部、熊本市、宇土市、宇城市北部、上益城郡西部

八代・水俣：宇城市南部、八代郡、八代市西部、葦北郡、水俣市

天草：天草市、上天草市、天草郡



絶滅 (EX)

オオカミ

Canis lupus Linnaeus, 1758

イヌ科

熊本県カテゴリー

絶滅 (EX)

環境省カテゴリー

絶滅 (EX)

選定理由 絶滅**生息環境** 詳細不明だが山地全域、餌となる中大型哺乳類の存在**生息状況** 細川重賢公の「毛介綺煥^{もつかいきまかん}」には 1758 年に山都町（旧矢部町）で捕獲された記録が残されている。また、八代市泉町（旧泉村）の矢山岳と京丈山の洞窟で頭骨等が発見された。さらに、熊本市城南町の貝塚から本種とされる歯が出土している。**生存への脅威** 森林伐採、捕獲・採集、伝染病**特記事項** 国内では 1905 年に奈良県で捕獲されて以後、生息が確認されていない。餌となる中大型草食哺乳類が比較的高密度に生息する必要があったと考えられる。

熊本博物館所蔵

ツキノワグマ

Ursus thibetanus G.Cuvier, 1823

クマ科

熊本県カテゴリー

絶滅 (EX)

環境省カテゴリー

選定理由 絶滅**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、豊富な餌（果実など）、冬眠用の樹洞が発達する大木**生息状況** 現在九州での生息の確実な証拠はない。県内では、球磨郡球磨村と八代市泉町（旧泉村）の洞穴から骨が発見されている。五木・五家荘および人吉・球磨でも、大正末期には姿を見せなくなったという情報がある。**生存への脅威** 森林伐採、人工造林、農地開発、捕獲・採集**特記事項** 大分と宮崎の県境の祖母傾山系でしばしば目撃情報が得られ調査も行われたが、確実な生息確認は得られていない。1987 年に大分県で捕獲された個体は 2010 年に DNA 解析で本州に分布するタイプであることが判明した。それ以前の確実な九州産個体は 1957 年の幼獣死体であり、すでに 50 年以上が経過していることから、環境省は 2012 年に九州のツキノワグマを「絶滅のおそれのある地域個体群」から削除した。

撮影場所：阿蘇カドリー・ドミニオン

ニホンカワウソ

Lutra nippon Imaizumi and Yoshiyuki, 1989

イタチ科

熊本県カテゴリー

絶滅 (EX)

環境省カテゴリー

絶滅 (EX)

選定理由 絶滅**生息環境** 生息地は河川の中下流域から沿岸部、豊富な餌（魚、エビ・カニ等）の存在、ねぐらとなる自然河岸や海岸**生息状況** 県内では、狩猟統計で 1923 年に 1 頭捕獲されたとの記録がある。それ以降の確実な生存記録や標本は残されていないが、聞き取り調査などから、各地の河川や海岸に生息していたことは確かである。なお、宇土市の遺跡から本種とされる下顎骨が出土している。**生存への脅威** 河川改修、海辺の改変等、捕獲・採集**特記事項** 国内では 1979 年に高知県須崎市で目撃されて以後、生息が確認されていない。県下の神社などには、本種の前肢が「カッパ」の手と称して保管されている可能性がある。2017 年に長崎県対馬で生きたカワウソが確認されたが、DNA 鑑定でユーラシアカワウソと判定された。

熊本博物館所蔵

絶滅危惧 I A 類 (CR)

ヒメヒミズ

Dymecodon pilirostris True, 1886

モグラ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境省カテゴリー**選定理由** 県内局限、地域的孤立・希少**生息環境** 山地や溪流沿いの岩石が堆積し土壌が未発達な場所、近縁種ヒミズとの競合を避ける場所**生息状況** 個体数は少なく、生息は九州中央山地に局所的。八代市泉町では 1985 年に 1 頭の死体が拾得され、2001 年に 3 頭が捕獲された記録が 2008 年に寄せられ、2014 年に溪流沿い（標高 970m）で 1 頭が捕獲された。2003 年に阿蘇郡高森町の祖母傾山系で本種とみられる死体が見つかったが、確実な同定には至っていない。九州では大分県と宮崎県の一部（祖母傾山系、九重山系）にも生息が知られていたが、近年の生息状況は不明である。五木・五家荘で確認、菊池・阿蘇に生息の可能性がある。**生存への脅威** 森林伐採、土地造成、その他（他種との競合、ニホンジカ増加による下層植生衰退）**特記事項** 小型の無脊椎動物を餌として半地中生活をしている。近縁種のヒミズとは尾の形状や歯の形態で区別する。近年のニホンジカによる森林植生の劣化が本種の個体群に影響をおよぼしている懸念がある。

撮影：安田雅俊

クロホオヒゲコウモリ

Myotis pruinosus Yoshiyuki, 1971

ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 II 類 (VU)**選定理由** 全国局限、県内局限、特殊生息生育環境**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらとなる樹洞、詳細は不明**生息状況** 2007 年に山都町の隧道内で 1 頭が捕獲された。その後も同所で 5 頭発見され、五木・五家荘で確認されている。県内の他の地域での確認事例はない。九州において生息が確認されたのは、当地以外では宮崎県綾町のみである。**生存への脅威** 森林伐採、人工造林**特記事項** 2007 年捕獲個体は標本化ができずに同定の最終判断はできなかったが、2008 年の捕獲個体は DNA 鑑定により本種と同定された。九州では宮崎県綾町での記録に続き 2 例目である。日本のコウモリ類の中では最小の部類に入る。

撮影：坂本真理子

ニホンカモシカ

Capricornis crispus (Temminck, 1836)

ウシ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境省カテゴリー
地域個体群 (LP)**選定理由** 県内局限、近年減少、地域的孤立・希少**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、豊富な餌となる下層植生、急傾斜の岩場を好む**生息状況** 1990 年代後半から本来の生息地である奥山で減少し、周辺部で見かける機会が多くなった。もともとは九州中央山地を中心に菊池・阿蘇、五木・五家荘、人吉・球磨に分布していたが、近年では南阿蘇外輪や西原村でも目撃情報が出てきており、ニホンジカの増加の影響による分散化が進んでいる可能性もある。約 25 年に亘るニホンカモシカ調査の結果、生息頭数が減少していることが分かり、九州内で 1000 頭を切っているものと推定される。**生存への脅威** 誤獲、伝染病、その他（他種との競合、ニホンジカ増加による下層植生衰退）**特記事項** ニホンジカに似るが、角が生えかわらないことや枝分かれしない点などで異なる。ニホンジカの食害による植生の衰退、くくり罠や防鹿ネットによる錯誤捕獲、疥癬症の伝染など、本種をとりまく環境は極めて厳しい。文化財保護法（特別天然記念物）。

撮影場所：宮崎市フェニックス自然動物園

絶滅危惧 I B 類 (EN)

ニホンモモンガ

Pteromys momonga Temminck, 1844

リス科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I B 類 (EN)
環境省カテゴリー

選定理由 県内局限

生息環境 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらや出産保育場所となる樹洞、豊富な餌（樹木の葉・芽・種子・果実・キノコ類など）の存在

生息状況 九州中央山地とその周辺部に生息しているが、個体数は少ない。2010年に水俣市大川の照葉樹二次林（標高 400~600m）において自動撮影された。菊池・阿蘇では未確認であるが、東部（祖母傾山系）に生息の可能性がある。九州では大分県と宮崎県の一部でも確認されている。五木・五家荘、人吉・球磨、八代・水俣で確認。

生存への脅威 森林伐採、人工造林

特記事項 滑空のための飛膜が発達している。ムササビよりはるかに小さい。リスと混同されることが多く、聞き取り調査では注意を要する。樹上の巣箱と自動撮影カメラを組み合わせた生息調査が有効である。



撮影：坂田拓司

オヒキコウモリ

Tadarida insignis (Blyth, 1861)

オヒキコウモリ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I B 類 (EN)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 II 類 (VU)

選定理由 全国局限、県内局限、特殊生息生育環境

生息環境 ねぐらは石垣や岩の隙間、鉄道高架やビルの隙間など、詳細は不明

生息状況 熊本市内で 2 例(1964)、阿蘇郡で 1 例(1981)の報告があるが、いずれも単独で偶然発見された例であった。近年の調査で、熊本城天守閣上空を飛翔する複数の個体や、新幹線高架をねぐらとする小規模のコロニーが確認された。菊池・阿蘇、荒尾・熊本、八代・水俣で確認。

生存への脅威 自然災害、その他（ねぐらとなる石垣の崩壊や工事）

特記事項 宮崎県と高知県などの無人島の岩の隙間、広島県の校舎の隙間で集団ねぐらが発見されている。また、近年は九州や本州において新幹線高架の隙間における生息確認が続いている。



撮影：坂本真理子

ノレンコウモリ

Myotis bombinus Thomas, 1906

ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧 I B 類 (EN)
環境省カテゴリー
絶滅危惧 II 類 (VU)

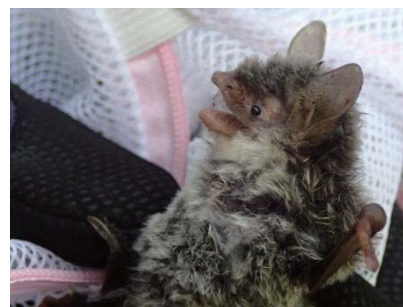
選定理由 全国局限、県内局限、特殊生息生育環境

生息環境 ねぐらや出産保育となる洞窟、餌となる昆虫が豊富に発生する森林

生息状況 県内では 1984 年に熊本市の防空壕で 2 頭が確認された後、情報が得られていなかった。RDB 補完調査による情報の蓄積で、県内 11 ヶ所の洞窟や隧道から確認されている。2005 年、熊本県内では初めての出産保育コロニーが熊本市金峰山近隣の人工洞で確認された。その後、菊池市や五木村の人工洞においても繁殖コロニーが発見された。しかし、いずれの洞窟も放置や改修による環境悪化が懸念される。菊池・阿蘇、五木・五家荘、荒尾・熊本、人吉・球磨で確認。

生存への脅威 森林伐採、人工造林、洞窟内環境変化

特記事項 モモジロコウモリに似るが、腿間膜の後縁に細毛を列生することと、長い耳珠で区別できる。九州南部からの報告例は多いが、北部では少ない。洞窟天井部のくぼみにコロニーを作る。冬眠コロニーは未だ発見されていない。



撮影：中野太九郎

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

テングコウモリ

Murina hilgendorfi (Peters, 1880)

ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
環境省カテゴリー**選定理由** 県内局限、特殊生息生育環境**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらとなる樹洞や洞窟、豊富な餌（昆虫など）の存在**生息状況** 全国から報告があるが、頻度は低い。熊本県でも確認された場所は10ヶ所である。菊池・阿蘇、五木・五家荘、人吉・球磨、荒尾・熊本で確認。**生存への脅威** 森林伐採、人工造林、その他（ニホンジカの増加による下層植生の減少に伴う昆虫類の減少）**特記事項** 活動期は森林の樹洞等をねぐらとするが、山間部の隧道を利用することもある。冬期は洞窟で発見されることが多い。銀色で長い差し毛と左右に突出した管状の長い鼻が特徴。近縁種のコテングコウモリに比べて大型である。

撮影：中野太九朗

コテングコウモリ

Murina ussuriensis Ognev, 1913

ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
環境省カテゴリー**選定理由** 県内局限、特殊生息生育環境**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらとなる樹洞や洞窟、豊富な餌（昆虫など）の存在**生息状況** 全国に分布する。2001年に五木村の混交林で冬眠中の本種が初めて確認されて以降、白髪岳林道の照葉樹林（2010）、五木村や内大臣の落葉広葉樹林（2012）、内大臣の隧道で本種を確認。飛行空間のある樹林内で生息を確認している。菊池・阿蘇、五木・五家荘、人吉・球磨で確認。**生存への脅威** 森林伐採、人工造林、その他（ニホンジカの増加による下層植生の減少に伴う昆虫類の減少）**特記事項** 森林の樹洞等をねぐらとするが、隧道の他、春期～秋期は巻いた枯れ葉の中に潜り込み休息する。近縁種のテングコウモリに比べて小型である。

撮影：田中英昭

ニホンイタチ

Mustela itatsi Temminck, 1844

イタチ科

熊本県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
環境省カテゴリー**選定理由** 近年減少、地域的孤立・希少、その他（外来種との競合）**生息環境** 河畔や水田、農耕地の周辺、自然林や二次林、混交林や草地、豊富な餌（昆虫や魚、両生類、小型哺乳類）の存在**生息状況** 外来種のシベリアイタチ（チョウセンイタチ）が分布を拡げ、本種の生息域は非常に狭まっている。2004～2005年の県内のロードキル個体の調査ではシベリアイタチが88%を占めたのに対して、ニホンイタチは12%を占めるにすぎなかった。天草ではその割合は40%と他地域よりも高かった。再調査が必要であり、その結果によっては、さらに上のランクに選定される可能性がある。**生存への脅威** 外来種の侵入**特記事項** 近縁で外来種のシベリアイタチが同所的に生息する可能性があるため、外部計測値を正確に記録するとともに、DNA鑑定の結果に基づいて種の同定を行う必要がある。

撮影：一柳英隆

準絶滅危惧 (NT)

ムササビ(ホオジロムササビ)

Petaurista leucogenys (Temminck, 1827)

リス科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー**選定理由** 地域的孤立・希少**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらとなる樹洞、餌となる多様な樹木の存在**生息状況** 市街地周辺の森林では宅地化や道路整備などの開発により森林の連続性が失われ、分布域が分断化されている。天草を除く各地で確認。**生存への脅威** 森林伐採、人工造林、土地造成**特記事項** ニホンモンガと同様、滑空のための飛膜が発達している。県内では「モマ」と呼ぶ地域が多い。

撮影：有馬博

ヤマネ

Glirulus japonicus (Schinz, 1845)

ヤマネ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー**選定理由** 県内局限**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらや出産保育場所となる樹洞、豊富な餌(液果や花の蜜、昆虫類など)の存在**生息状況** ヤマネの生息が確認された地域は県北では山鹿市、菊池市、阿蘇市、高森町及び南阿蘇村、九州中央山地では山都町、美里町、宇城市、県南では八代市、五木村、水上村、湯前町及び水俣市である。天草では確認されていない。最近の巣箱自動撮影法により、奥山の自然度が高い森林以外にも、攪乱を強く受けた森林(美里町白石野、八代市妙見など)にも生息が確認された。本来的に個体数は少ない。**生存への脅威** 森林伐採、人工造林**特記事項** 背中の中線に沿って黒い線があり、動きは敏捷である。夜行性で地面にも降りるが、樹上生活をしている。冬眠をする。文化財保護法(天然記念物)。

撮影：坂田拓司

カヤネズミ

Micromys minutus (Pallas, 1771)

ネズミ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー**選定理由** 特殊生息生育環境、地域的孤立・希少**生息環境** イネ科・カヤツリグサ科の多い草地、河川敷・沼沢地・草原など**生息状況** もともと不安定な環境に生息しており、自然遷移の進行や土地開発、改修によって生息環境が減少している。県内各地で確認。**生存への脅威** 池沼の改修、河川改修、草地の開発、ヨシ原の減少、管理放棄、除草、自然遷移**特記事項** 日本で最小のネズミ。球巣によってその生息を確認できる。管理が放棄された草地が増え、生息環境が徐々に失われている。

撮影：坂本真理子

カワネズミ

Chimarrogale platycephalus (Temminck, 1842) トガリネズミ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
地域個体群 (LP)

選定理由 特殊生息生育環境**生息環境** 清冽な山間の河川、豊富な餌（水生昆虫・魚類・両生類など）の存在**生息状況** 標高や地形よりも自然護岸の河川環境と餌生物の量が生息条件として重要である。以前は平野部にも生息していたとされるが、現在は山間の清流に限られている。食物や生息環境を溪流に依存するため、河川改修、特にコンクリート護岸などの環境改変に脆弱である。砂防工事などの濁流による水生昆虫相の壊滅といった環境変化にも大きな影響を受ける。天草を除く各地で確認されているが、個体数はあまり多くない。

撮影：一柳英隆

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、森林伐採、ダム工事**特記事項** 手足の指の両側にびっしりと生える剛毛が「水かき」の役割をはたし、耳は小さく毛の間にうもれているなど水生適応している。水中を遊泳する銀色に輝くネズミとして目撃されることがある。

コキクガシラコウモリ

Rhinolophus cornutus Temminck, 1834 キクガシラコウモリ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

選定理由 特殊生息生育環境**生息環境** 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらや出産保育となる洞窟、豊富な餌（昆虫など）の存在**生息状況** 県内 20 以上の自然洞や人工洞で確認されている。洞内の気温や湿度の関係でねぐらが左右され、季節的にねぐらを変更する。県下各地で確認。

撮影：坂田拓司

生存への脅威 森林伐採、人工造林、洞窟内環境変化**特記事項** 森林地帯の洞窟をねぐらにし、林内の下層付近で餌となる昆虫を捕食している。分布は広いが、個体数は多くない。近縁のコキクガシラコウモリの約 1/2 の大きさである。体毛は淡褐色。

モモジロコウモリ

Myotis macrodactylus (Temminck, 1840) ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

選定理由 特殊生息生育環境**生息環境** ねぐらとなる洞窟や隧道・暗渠水路など主に山地に生息、河川の水面上で採餌することが多い**生息状況** 県内 20 以上の自然洞や人工洞で確認されている。また森林内の河川上で目撃や捕獲情報がある。錦町の元海軍地下施設では 700 頭の出産保育コロニーが確認されている。全体的には報告事例が少ない。菊池・阿蘇、五木・五家荘、人吉・球磨で確認。

撮影：坂田拓司

生存への脅威 森林伐採、人工造林、洞窟内環境変化**特記事項** ノレンコウモリやクロホオヒゲコウモリに似るが、尾膜後縁の細毛は列生せず、側膜が踵または下腿につくことで区別できる。背面は灰黒褐色で腹部は白っぽい。下腹部から大腿部に白っぽい毛が密生する。

ユビナガコウモリ

Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

選定理由 特殊生息生育環境

生息環境 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらや出産保育の場である複数の洞窟、豊富な餌（昆虫など）の存在

生息状況 県内 20 以上の自然洞や人工洞で確認されている。球磨村の大瀬洞は九州内でも有数の生息地で冬期は約 2 万頭が冬眠に利用していたが、近年は 1 万頭程度と減少傾向にある。江戸時代に作られた菊池市山間部の農業用水路隧道で、2017 年夏期に県内初となる数千頭の出産保育コロニーが確認された。県内全域で確認。



撮影：坂田拓司

生存への脅威 森林伐採、人工造林、洞窟内環境変化

特記事項 季節的な移動が見られ、出産保育期と冬眠期に利用する洞窟は異なる。大瀬洞における近年の減少傾向要因は不明である。菊池市の農業用水路隧道の改修計画は、本種の保全に配慮した工法や工期が採用されたが、モニタリングを続ける必要がある。

情報不足 (DD)

ヤマコウモリ

Nyctalus aviator Thomas, 1911

ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
情報不足 (DD)
環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由 県内局限、特殊生息生育環境

生息環境 成熟した広葉樹林や混交林・社寺林、ねぐらとなる樹洞、豊富な餌（昆虫など）の存在

生息状況 1984 年に熊本市内の中学校体育館で捕獲されて以降情報がなかったが、その後の調査によって 2001 年に八代市泉町五家荘の自然林内で 2 頭捕獲された。荒尾・熊本、五木・五家荘で確認。



撮影：長尾圭祐

生存への脅威 森林伐採、人工造林

特記事項 日本の食虫性コウモリでは最大種。翼を広げると 40cm になる。大木の樹洞をねぐらとする。

ヒナコウモリ

Vespertilio sinensis (Peters, 1880)

ヒナコウモリ科

熊本県カテゴリー
情報不足 (DD)
環境省カテゴリー

選定理由 県内局限、特殊生息生育環境

生息環境 成熟した広葉樹林や混交林、ねぐらとなる樹洞や海蝕洞・岩の割れ目など、豊富な餌（昆虫など）の存在

生息状況 全国に分布するが西日本からの採集記録は少ない。県内では 1967 年小川町での捕獲記録があるだけで、その後の調査でも生息情報は得られていない。八代・水俣で確認。



撮影：船越公威

生存への脅威 森林伐採、人工造林

特記事項 大木の樹洞を隠れ家としているが、海食洞や家屋から発見されることもある。近年は新幹線高架の隙間から見つかる例もあり、熊本県でも精査が望まれる。飛翔力が高く季節的な長距離移動が知られている。

要注目種 (AN)

スミスネズミ

Eothenomys smithii (Thomas, 1905)

ネズミ科

熊本県カテゴリー
要注目種 (AN)
環境省カテゴリー

選定理由 地域的孤立・希少**生息環境** 大きな山塊につながる山地の樹林や山麓に近接する草地やササ原、湿度が高く落葉層の厚い環境や豊富な下層植生**生息状況** 低地から高山の森林とその周辺に生息している。天然林に多いが人工林にも生息する。分布自体は広いが、山地部や山塊につながる山麓に限られているため分布域は分断されている。また、湿潤で下層植生が密な環境を好み、主として植物食の本種にとって、ニホンジカの食害による森林環境の劣化や下草・ササ原の消失は生息数の減少に大きく影響していると思われる。菊池・阿蘇、五木・五家荘、人吉・球磨で確認。2009年に阿蘇外輪山で、2010年に阿蘇中央火口丘で、2014年に小国町で捕獲されている。**生存への脅威** 森林伐採、その他（ニホンジカ増加による下層植生衰退）**特記事項** ハタネズミに似るが、本種の方が頭胴長に対する尾率は高めである。ハタネズミとともに捕獲されることがあるため、頭骨にもとづく正確な種同定を行う必要がある。

提供：国土交通省

ハタネズミ

Microtus montebelli (Milne-Edwards, 1872)

ネズミ科

熊本県カテゴリー
要注目種 (AN)
環境省カテゴリー

選定理由 地域的孤立・希少**生息環境** 草地や農耕地、若い植林、河川敷や牧草地など**生息状況** 低地から高山まで分布する。草地や農耕地周辺に多いが、森林にも現れる。阿蘇から大分県九重にかけての草地では普通種だが、それ以外の地域では局所的に分布し個体数も少ない。天草を除く各地で確認。**生存への脅威** 人工造林、草地の開発**特記事項** 地下にトンネルを造って生活している。1992年頃阿蘇北外輪山でネザサが実をつけて本種が大発生した。足のしよ球数が5であれば本種、6であればハタネズミとスミスネズミに共通である。

撮影：坂本真理子

ニホンジネズミ

Crocidura dsinezumi (Temminck, 1842)

トガリネズミ科

熊本県カテゴリー
要注目種 (AN)
環境省カテゴリー

選定理由 近年減少**生息環境** 低地の河畔や水辺、農耕地周辺、低山の低木林**生息状況** 河原などの水辺や森林だけでなく、畑の周辺や人家の庭で見つかることもある。開発や環境変化により、生息地・生息数の減少が懸念される。天草を除く各地で生息が確認されている。最近では菊池・阿蘇、荒尾・熊本で確認されている。**生存への脅威** 河川改修、土地造成**特記事項** 親子で移動する際は、親の尾を子がくわえ、その尾を次の子がくわえ、というように数珠つなぎになって移動するキャラバン行動が見られる。

撮影：坂本真理子

(3) 文献

1. Abe, H. (1967) Classification and Biology of Japanese Insectivora (Mammalia). 1. Studies on Variation and Classification. J. Fac. Agr., Hokkaido Univ., 55 : 191-265.
2. Abe, H. (1985) Changing Mole Distribution in Japan. Contemporary Mammalogy in China and Japan (ed. T. Kawamichi) . Mammalogical Society of Japan, pp. 108-112.
3. 阿部永 (1996) 日本産食虫類の種名の検討. 哺乳類科学, 36 (1) : 97-108.
4. 阿部永 (2003) カワネズミの捕獲, 生息環境および活動. 哺乳類科学, 43 (1) : 51-65.
5. 阿部永 (2007) 日本産哺乳類頭骨図説. 増補版. 北海道大学出版会. 300pp.
6. 阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・柴田政明 (1994) 日本の哺乳類. 東海大学出版会.
7. 阿部永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 (2005) 日本の哺乳類. 改訂版. 東海大学出版会, 206pp.
8. 阿部永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 (2008) 日本の哺乳類・改訂2版. 東海大学出版会, 206pp.
9. 阿部永・横畑泰志 (編) (1998) 食虫類の自然史. 比婆科学教育振興会. 391pp.
10. 阿部幸六・倉成栄吉 (1967) 阿蘇行. 九州野鳥, 7 (2) : 13-20.
11. 相川拓也・堀野眞一・市原優・高橋裕史 (2018) ニホンジカ・カモシカ識別キットーその使い方と使用例ー. 森林防疫, 67(1):15-24.
12. 安藤元一 (1996) ニホンカワウソ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 I, 平凡社, pp.140-141.
13. 安藤元一 (2008) ニホンカワウソー絶滅に学ぶ保全生物学. 東京大学出版会. 233pp.
14. 青木文一郎 (1915) 日本産鼠科. 東京動物学会.
15. 荒井秋晴 (1978a) 山江村の哺乳類. 九州自動車道八代～えびの間自然環境調査 (その2) 報告書. 道路緑化保全協会, pp. 101-107.
16. 荒井秋晴 (1978b) 哺乳類. 九州自動車道八代～えびの間自然環境調査 (その3) 報告書. 道路緑化保全協会, pp. 83-84.
17. 荒井秋晴 (1980) 大畑地区の哺乳類. 九州自動車道八代～えびの間自然環境調査 (その4) 報告書. 道路緑化保全協会, pp. 59-64.
18. 荒井秋晴 (1981a) 阿蘇の獣たち. 阿蘇火山, 東海大学出版会, pp. 40-48.
19. 荒井秋晴 (1981b) 五木村の哺乳動物. 川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡, pp. 29-31.
20. 荒井秋晴 (1982a) 哺乳類. 昭和56年度川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 57-58.
21. 荒井秋晴 (1982b) ハタネズミの異常増加に関する一推論. 土龍, (10) : 56-60.
22. 荒井秋晴 (1983) 哺乳類. 昭和57年度川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 79-84.
23. 荒井秋晴 (1984a) 南小国と五木村で捕獲されたカワネズミ. ふるさとの博物誌 (1) . 土龍, (11) : 89-90.
24. 荒井秋晴 (1984b) 哺乳類. 昭和58年度川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 89-94.

25. 荒井秋晴 (1985) 哺乳類. 昭和 59 年度川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 31-34.
26. 荒井秋晴 (1986) スミスネズミとハタネズミ. ふるさとの博物誌 (2) .土龍, (12) : 20-21
27. 荒井秋晴・入江照雄 (1989) 九州におけるヒメヒミズ *Dymecodon pilirostris* の新捕獲地. 哺乳類科学, 29 (2) : 55.
28. Arai, S., T. Mori, H. Yoshida and S. Shiraishi (1985) A Note on the Japanese Water Shrew, *Chimarrogale himalayica platycephala*, from Kyushu. J. Mamm. Soc. Japan, 10 (4) : 193-203.
29. 荒井秋晴・中園敏之・坂田拓司・田悟和巳・中村匡聡 (2006) 熊本県におけるイタチ属 2 種の同定と分布の現状. 日本動物学会九州支部・日本植物学会九州支部・日本生態学会九州地区合同鹿児島大会プログラム・講演要旨集 : 30.
30. 荒井秋晴・白石哲 (1982a) 九州におけるハタネズミの個体群生態. I. 個体数および行動圏の変動. 九大農学芸誌, 36 (2, 3) : 89-99.
31. 荒井秋晴・白石哲 (1982b) 九州におけるハタネズミの個体群生態. II. 個体群変動と外的要因との関係. 九大農学芸誌, 36 (4) : 183-189.
32. Arai, S., S. Shiraishi and T. A. Uchida (1983a) Population ecology of the Japanese field vole (*Microtus montebelli*) in Kyushu. III. Contagious distribution in the growth phase. J. Fac. Agr., Kyushu Univ., 27(3, 4):143-150.
33. Arai, S., S. Shiraishi and T. A. Uchida (1983b) Population Ecology of the Japanese Field Vole (*Microtus montebelli*) in Kyushu. IV. Criteria for determining breeding condition and breeding season. J. Fac. Agr., Kyusyu Univ., 27(3, 4):165-178.
34. 荒井秋晴・坂田拓司・中園敏之・松下正志・長尾圭祐・本郷文和 (2005) 熊本県における森林性および洞窟性コウモリ類 (I). 熊本野生生物研究会誌, 4 : 1-9.
35. Asahi, M. (1985) Dispersion of Mammals Introduced to Japan. Contemporary Mammalogy in China and Japan (ed. T. Kawamichi) . Mammalogical Society of Japan, pp. 142-145.
36. 馬場稔 (1981) ムササビの成長. VULPES, 8 : 23-26.
37. 馬場稔・江口和洋 (1976) ムササビの聞き込み調査. VULPES, 4 : 17-18.
38. Baba, M., T. Doi, and Y. Ono. (1982) Home range utilization and nocturnal activity of the giant flying squirrel, *Petaurista leucogenis*. Jap. J. Ecol., 32: 189-198.
39. 文化庁 (1976) 天然記念物緊急調査. 植生図. 主要動物地図 : 43. 熊本県.
40. 千葉徳爾 (1959) 九州島北部の野生大型哺乳類分布. 地理学評論, 32 (9) : 468-480.
41. Corbet, G. B. (1978) The Mammals of the Palaearctic Region: A Taxonomic Review. British Museum (Natural History) and Cornell University Press. London and Ithaca.
42. 土肥昭夫 (1977) 九州におけるニホンカモシカの生息状況. VULPES, 5 : 19-21.
43. 土肥昭夫・馬場稔 (1978) ムササビー夜の森の愛嬌もの. 九州沖縄の生きものた

- ち. 西日本新聞社, (4) :113-132.
44. Doi, T., Y. Ono, T. Iwamoto and T. Nakazono (1987) Distribution of Japanese Serow in Its Southern Range, Kyusyu. The Biology and Management of Capricornis and Related Mountain Antelopes (ed. H. Soma). Croom Helm, London, NewYork, Sydney, pp.93-103.
45. 江口和洋 (1975) 矢部キツネの標識調査. VULPES, 3 (1,2) :10-11.
46. 江口和洋・土肥昭夫・池田啓・伊沢雅子 (1978) 九州における中大型哺乳類の分布. VULPES, 6 :12-18.
47. 江口和洋・池田啓・五嶋聖治・中園敏之 (1974) 矢部キツネマーキング調査. VULPES, 2 (2) :1-2.
48. Eguchi, K., T. Nakazono, K. Higashi, T. Doi and Y. Ono (1977) Tracking of the Hondo Fox (*Vulpes vulpes japonica* Gray) by Radio telemetry. JIBP Synthesis (Tokyo), 17 :216-225.
49. Eguchi, K. and T. Nakazono (1980) Activity studies of Japanese red foxes, *Vulpes vulpes japonica* Gray. Jap. J. Ecol. 30:9-17.
50. 遠藤晃・馬場稔・河野淳一・土肥昭夫 (2008) 植林地防鹿ネットによるニホンカモシカ錯誤捕獲の事例. 日本哺乳類学会 2008 年度大会講演要旨集, p.82.
51. 江崎悌三 (1935) Duke of Bedford の動物学探検. [I] 植物及動物, 3 (7) :1348-1354. [II] 同誌, 3 (8) :1505-1512. [III] 同誌, 3 (9) :1671-1678. [IV] 同誌, 3 (10) :1835-1842.
52. 藤井尚教 (1985) 熊本県における野生ニホンザルの生息調査 (1). 尚綱大学研究紀要, (8) :91-107.
53. 藤井尚教 (1986) 熊本県における野生ニホンザルの生息調査 (2). 尚綱大学研究紀要, (9) :55-71.
54. 藤井尚教 (1988) 熊本県における野生ニホンザルの生息調査 (3). 尚綱大学研究紀要, (11) :103-119.
55. 藤井尚教 (1992) 熊本県で頻発したサルによる傷害事件とその問題点について. 尚綱大学研究紀要, (15) :87-109.
56. 藤井尚教 (1993) 熊本県におけるサルの民俗論序説—球磨郡相良村で— . 尚綱大学研究紀要, (16) :41-52.
57. 藤井尚教 (1994) サルの手や厩猿等に関する地域比較研究. 球磨郡相良村と五木村の比較. 尚綱大学研究紀要, (17) :47-54.
58. 藤井尚教 (1995) サルの手や厩猿等に関する地域比較研究 (その2) —球磨郡川辺川流域において— . 尚綱大学研究紀要, (18) :57-71.
59. 藤井尚教 (1996) サルと河童—サルの手考から— . 尚綱大学研究紀要, (19) :59-75.
60. 藤井尚教 (1998) サルと河童. その2. サルと河童の強弱関係について. 尚綱大学研究紀要, (21) :85-93.
61. 藤井尚教 (2001) 熊本県における野生ザルの現況. 尚綱大学研究紀要, (24) :47-68.
62. 福岡県 (2011) 福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック 2014. 福岡県環境部自然環境課. 240pp.
63. 船越公威 (1975) 大瀬洞及び大瀬のたて穴におけるユビナガコウモリの動態について

- て. 土龍, (5) : 19-20.
64. 船越公威 (1978) 翼手類における種間関係特に周年の活動および居住地選択に関する比較考察と今後の課題. 哺乳類科学, (36) : 27-39.
 65. 船越公威 (1984) テングコウモリ *Murina leucogaster hilgendorfi* (Peter). ふるさとの博物誌 (1) , 土龍, (11) : 90-91.
 66. 船越公威 (1986) 熊本のヤマコウモリ *Nyctalus lasiopterus aviator* Thomas, 1911. 土龍, (12) : 9-11.
 67. 船越公威 (1997) 宮崎県のコウモリ類. 宮崎県総合博物館研究紀要, (20) : 17-24.
 68. 船越公威・荒井秋晴 (1987) 哺乳類. (五木村学術調査-自然編). 五木村役場, pp. 405-417.
 69. 船越公威・入江照雄 (1982) 九州におけるユビナガコウモリの個体群動態. 土龍, (10) : 23-34.
 70. 船越公威・入江照雄 (1987) 洞窟棲コウモリ. 五木村学術調査-自然編 (五木村総合学術調査団編集. 五木村役場, pp. 720-733.
 71. 船越公威・長岡研太・竹山光平・犬童まどか (2009) コテングコウモリ *Murina ussuriensis* におけるアカメガシワトラップのねぐら利用と繁殖生態. 哺乳類科学, 49:245-256.
 72. 船越公威・小野明日香・港眞美 (2015) 鹿児島県北部とその周辺域におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の生息確認と分布. Nature of Kagoshima, 41: 1-6.
 73. 船越公威・佐藤顕義・大沢夕志・大沢啓子・佐伯綾香 (2016) 鹿児島県の新幹線高架橋で発見されたオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の生息状況. Nature of Kagoshima, 42:5-11.
 74. 船越公威・内田照章 (1974) 翼手類の系統と適応. IV. ユビナガコウモリの採食活動について. 動物学雑誌, 83 (4) : 328.
 75. 船越公威・内田照章 (1975) 温帯に生息する食虫性コウモリの生理・生態的適応に関する研究. 1. ユビナガコウモリの採食活動について. 日本生態学会誌, 25 (4) : 217-234.
 76. Funakosi, K. and T. Uchida (1978) Studies on the physiological and ecological adaptation of temperate insectivorous bats. II. Hibernation and winter activity in some cave-dwelling bats. Jap. J. Ecol., 28(3) : 237-261.
 77. 後藤勝一 (1872) 阿蘇山系におけるノネズミの動きと対策. 森林防疫, 21 : 16-18.
 78. 羽澄俊裕 (1996) ツキノワグマ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 I. 平凡社, pp. 144-147.
 79. 日野光次・森田忠義 (1964) 鹿児島県の動物. 鹿児島県の自然. 鹿児島県理科教育協会 (編) , pp. 173-193.
 80. 平岩馨邦 (1967a) 私の動物記. 平岩先生古稀記念著書刊行会 (福岡) .
 81. 平岩馨邦 (1967b) 続・私の動物記. 平岩先生古稀記念著書刊行会 (福岡) .
 82. 平岩馨邦・三宅貞祥・南学・内田照章・澄川精吾・吉田博一 (1954) 豪雨に襲われた阿蘇山麓の野鼠. 九大農学芸誌, 14 (3) : 467-473.
 83. 平岩馨邦・徳田御稔・内田照章・吉田博一 (1957) 九州における野鼠の分布. 九大農学芸誌, 16 (1) : 157-163.
 84. 平岩米吉 (1981) 狼-その生態と歴史-. 池田書店, pp. 1-308. 動物文学会発行.

85. Hanacki, J. H., K. E. Kinman and J. W. Koepl (eds.) (1982) *Mammal Species of the World: A Taxonomic and Geographic Reference*. Association of Systematics Collections. Lawrence, Kansas, USA.
86. 原本すみれ・安田雅俊・徳田誠 (2017) 佐賀市内におけるオヒキコウモリの活動時期 (2016年熊本地震の前震直後の観察を含む). 佐賀自然史研究, 22:13-17.
87. Ikeda, H., M. Yasuda, M. Sakanashi and T. Oshida (2011) Origin of *Callosciurus erythraeus* introduced into the Uto Peninsula, Kumamoto, Japan, inferred from mitochondrial DNA analysis. *Mammal Study*, 36: 61-65.
88. 池田啓・江口和洋 (1978) 九州北部におけるニホンザルの分布. にほんざる, (4): 49-60.
89. 池田浩一 (1991) 九州で発生したスミスネズミのヒノキ造林木加害. 森林防疫, 40(9): 12-15.
90. 池田浩一・小泉透・矢部恒晶・宮島淳二・讃井孝義・吉岡信一・吉本喜久雄・住吉博和・田實秀信 (2001) 九州におけるニホンジカの生態と被害防除. 森林防疫, 50(8):2-19.
91. 今泉吉典 (1949) 分類と生態. 日本哺乳動物図説. 洋々書房.
92. Imaizumi, Y. (1957) Taxonomic studies on the rebacked vole from Japan. Part 1. Major divisions of the vole and descriptions of *Eothenomys* with a new species. *Bull. Nat. Sci. Mus.*, (40):195-216.
93. 今泉吉典 (1960) 原色日本哺乳類図鑑. 保育社.
94. Imaizumi, Y. (1962) On the species formation of the *Apodemus speciosus* group, with special reference to the importance of relative values in classification. *Bull. Nat. Sci. Mus.*, (49):163-259.
95. 今泉吉典 (1996) 動物の分類—理論と実際—. 第一法規出版.
96. 今泉吉典 (1970) 日本哺乳動物図説上巻. 新思潮社.
97. 今泉吉典 (監修) (1988) 世界哺乳類と名辞典. 平凡社.
98. 今泉吉典・吉行瑞子 (1965) 日本産オヒキコウモリの分類学的考察. 哺乳動物学雑誌, 2 (4): 105-108.
99. 入江照雄 (1969a) 立神, 油谷地区の鍾乳洞に棲む動物について. 土龍, (1): 4-6.
100. 入江照雄 (1969b) 人吉, 球磨, 五木, 五家荘地区の石灰洞穴と動物. 人吉・球磨・五木・五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書. 熊本県, pp. 137-158.
101. 入江照雄 (1970a) 大瀬, 権現山付近の洞穴に棲む動物について. 土龍, (2): 13-16.
102. 入江照雄 (1970b) 大金峰洞に棲む動物について. 土龍, (2): 29-30.
103. 入江照雄 (1973) 球磨村鍾乳洞調査報告. III. 当該地域の鍾乳洞の特性と可能性. 土龍, (4): 5-8.
104. 入江照雄 (1975a) 山江村鍾乳洞調査報告. II. 大河内付近の鍾乳洞について. 土龍, (5): 3-7.
105. 入江照雄 (1975b) 「大瀬のたて穴」の開発に思う. *Japan Caving*, 7 (2): 40-43.
106. 入江照雄 (1977) 熊本の洞窟動物. 熊本の自然 (日本生物教育会第32回全国大会記念誌), pp. 60-63.

107. 入江照雄 (1978a) 山江村, 坂本村の洞窟動物. 九州自動車道八代～えびの間自然環境調査 (その2) 報告書. 道路緑化保全協会, pp. 195-209.
108. 入江照雄 (1978b) 山江村, 坂本村の洞窟動物. 九州自動車道八代～えびの間自然環境調査 (その3) 報告書. 道路緑化保全協会, pp. 108-109.
109. 入江照雄 (1979) 川辺川流域の洞窟と洞窟動物. 川辺川流域総合予備調査報告. 川辺川流域総合予備調査団, pp. 15-20.
110. 入江照雄 (1981) 五木村の洞窟. 川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 41-43.
111. 入江照雄 (1982a) 阿蘇山溶岩洞群の動物. 土龍, (10) : 3-22.
112. 入江照雄 (1982b) 九州中, 南部におけるコウモリ類の動態調査 (II) 新地の穴のコウモリ. 宇土半島, 自然と文化II, pp. 105-112.
113. 入江照雄 (1983) 洞窟調査. 昭和57年度川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 109-119.
114. 入江照雄 (1984) 洞窟調査. 昭和58年度川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 131-152.
115. 入江照雄 (1987) 洞窟動物. 五木村学術調査一自然編 (五木村総合学術調査団編集). 五木村役場, pp. 712-719.
116. 入江照雄 (1989) 幻のモグラを求めて. ヒメヒミズ. 五家荘, (50) : 2.
117. 入江照雄 (1993) 泉村の洞窟産動物目録. 泉村の自然一資料編一. 五家荘の会.
118. 入江照雄 (1997) 暗闇に生きる動物たち. 熊本生物研究所. 324pp.
119. 入江照雄 (1999) 熊本市の哺乳類目録. 熊本市の植物・動物目録. 熊本市史関係資料集 (3) : 61-63.
120. 入江照雄 (2007a) 九州の主な洞窟と動物. 続・暗闇に生きる動物たち. 熊本生物研究所, pp. 6-16.
121. 入江照雄 (2007b) 続・暗闇に生きる動物たち. 熊本生物研究所. 426pp.
122. 入江照雄 (2013) 暗闇に生きる動物たち. Series. 3. 熊本生物研究所. 347pp.
123. 入江照雄・荒井秋晴 (1975) 九州中・南部におけるコウモリ類の動態調査 (1). 熊本生物研究誌, (8) : 1-11.
124. 入江照雄・船越公威 (1982) 洞窟動物について. 昭和56年度川辺川ダム建設に伴う文化財等に関する調査報告書. 熊本県球磨郡五木村, pp. 79-87.
125. 入江照雄・吉村和久・宗裕・井倉洋二・池田徹・常盤洋・永松辰二 (1984) 五木村洞窟群の総合予備調査報告. 土龍, (11) : 1-16.
126. 石川金太郎 (1934) 偏平なシカの角. 動物学雑誌, 46 : 343.
127. 五木村教育委員会 (1978) 五木の動物. 五木の自然, pp. 46-55.
128. 岩本俊孝・坂田拓司. 中園敏之・歌岡宏信・池田浩一・西下勇樹・常田邦彦・土肥昭夫 (2000) 糞粒法によるシカ密度推定式の改良. 哺乳類科学, 40:1-17.
129. 岩野泰三 (1974) ニホンザルの分布. にほんざる, (1) : 5-62.
130. 壁村勇二・久保田勝義・鍛冶清弘・椎葉康喜・村田育恵・井上幸子・馬淵哲也・内海泰弘・榎木勉 (2010) 宮崎演習林における哺乳類目撃数のモニタリング. 九州大学農学部演習林報告, 91:29-33.
131. 上益城郡誌編纂委員会 (1921) 上益城郡誌.

132. 鹿本郡役所 (1923) 鹿本郡誌.
133. 兼松仁郎 (1980) 西海・玄海地方の野鼠を中心とする小型哺乳類相. 長崎県・佐賀県の北部, 西部地域の哺乳類と鳥類の生息状況調査報告書. 西日本技術開発株式会社. pp. 35-54.
134. 金子弥生 (1996) ニホンアナグマ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 I, 平凡社. pp. 142-143
135. 金子之史・村上興正 (1996) 日本産齧歯類. 哺乳類科学, 36 (1) : 109-128.
136. 鹿児島県 (2016) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物—鹿児島県レッドデータブック 2016—. <http://www.pref.kagoshima.jp/kurashi-kankyo/kankyo/yasei/reddata/index.html> (2018年6月30日参照).
137. 歌岡宏信・松岡秀樹・坂本真理子・坂田拓司・長尾圭祐・平川朝子・北田薫・中富尚士 (1996) 熊本市に生息する野生動物の分布. —熊本市における野生動物の都市定住化に関するアンケート基礎調査より—. 熊本野生動物研究会誌, 2 : 49-57.
138. 川田伸一郎・岩佐真宏・福井大・新宅雄太・天野雅男・下稲葉さやか・福井大・樽創・姉崎智子・横畑泰志, (2018). 世界哺乳類標準和名目録. 哺乳類科学 58 (別冊) : 1-53.
139. 環境庁 (編) (1983) 第2回緑の国勢調査・第2回自然環境保全基礎調査報告書. 540pp., 同資料編, 610pp.
140. 環境庁 (1988) 第3回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書. 大蔵省印刷局.
141. 環境庁 (編) (1991) 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 財団法人自然環境研究センター, 340pp.
142. 環境省 (編) (2002) 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—脊椎動物編. 日本野生生物研究センター. 333pp.
143. 環境省自然環境局生物多様性センター (2002) 生物多様性調査. 動物分布調査 (哺乳類) 報告書. 241pp.
144. 環境省自然環境局生物多様性センター (2010) 自然環境保全基礎調査. 動物分布調査. 日本の動物分布図集. 1072pp.
145. 環境省環境省自然環境局. レッドリスト 2018. <https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist> (2018年6月30日参照)
146. 川道武男 (1996) ムササビ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 1. 平凡社. pp. 78-83.
147. 川道武男 (2015) ムササビ. 空飛ぶ座ぶとん. 築地書館, 251pp.
148. 建設省・川辺川工事事務所 (1995) 川辺川ダム事業における動植物に良好な環境の保全と創造.
149. 菊池市 (1971) 竜門の鳥獣. 竜門ダム建設に伴う委託調査報告書. pp. 146-157.
150. 岸田久吉 (1924) 哺乳動物図解. 日本鳥学会.
151. 岸田久吉 (1953) 代表的林棲哺乳動物ホンザル調査報告. 鳥獣調査報告, (14) : 1-92.
152. 岸元良輔 (1996) ニホンカモシカ. 日本動物大百科 2. 哺乳類 II. 平凡社. pp. 106-111.
153. 北村直司・小原巖・南雅代・中村俊夫 (1999) 熊本県八代郡泉村京丈洞穴より産出したニホンオオカミ全身骨格. 熊本博物館館報, (11) : 35-69.
154. 北村直司 (2000) 五家荘 (京丈山) から発見されたニホンカモシカの頭骨. 熊本博物館館報, (12) : 41-45.
155. 小泉透 (2002) 九州におけるニホンジカによる森林被害の現状. 九州森林研究,

- 55:162-165.
156. 小泉透 (2006) 強度の狩猟下にあるニホンジカ個体群にみられた齢比の変化. 哺乳類科学, 46:53-55.
 157. 小泉透・矢部恒晶・井上晋 (2006) ニホンジカの採食がスズタケの動態に及ぼす影響. 九州森林研究, 59:90-93.
 158. Koizumi, T., S. Hamasaki, M. Kishimoto, M. Yokoyama, M. Kobayashi and A. Yasutake (2009) Reproduction of female sika deer in Western Japan. Sika Deer. Biology and Management of Native and Introduced Populations, D. R. McCullough, S. Takatsuki and K. Kaji (eds.), Springer. pp.327-344.
 159. コウモリの会 (編) (2011) コウモリ識別ハンドブック. 改訂版. 文一総合出版.
 160. 小宮輝之 (2002) 日本の哺乳類. フィールドベスト図鑑. 12. 学習研究社.
 161. 小柳恭二・辻明子 (2006) 熊本県におけるコテングコウモリ *Murina ussuriensis* Ognev 1913 の初記録と冬期のねぐらの特徴と環境条件. 東洋蝙蝠研究所紀要 (5) : 23-26.
 162. 熊本県 (1950) 天草国立公園資料. 60pp.
 163. 熊本県 (1969) 人吉・球磨・五木・五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書. 183pp.
 164. 熊本県 (1977) 阿蘇国立公園学術調査報告書. 70pp.
 165. 熊本県 (1978) 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書 (哺乳類). pp. 1-32.
 166. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1998) 熊本県の保護上重要な野生動植物—レッドデータブックくまもと—. 381+31pp. 熊本県自然保護課.
 167. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (2004) 熊本県の保護上重要な野生生物リスト—レッドリストくまもと2004—. 67pp. 熊本県自然保護課.
 168. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (2009) 改訂・熊本県の保護上重要な野生動植物—レッドデータブックくまもと2009—. 熊本県自然保護課.
 169. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (2014) 熊本県の保護上重要な野生生物リスト—レッドリストくまもと2014—. 熊本県自然保護課.
 170. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1992) 九州中央山地における希少野生動植物の実情と保護方策 [調査報告書]. 熊本県環境公害部環境保全課.
 171. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1993) 人吉・球磨地域における希少野生動植物の実情と保護方策 [調査報告書]. 熊本県環境公害部環境保全課.
 172. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1994a) 天草地域における希少野生動植物の実情と保護方策 [調査報告書]. 熊本県環境公害部環境保全課.
 173. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1994b) 芦北水俣地域における希少野生動植物の実情と保護方策 [調査報告書]. 熊本県環境公害部環境保全課.
 174. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1995) 阿蘇・県北地域における希少野生動植物の実情と保護方策 [調査報告書]. 熊本県環境公害部環境保全課.
 175. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1996) 県央地域における希少野生動植物の実情と保護方策 (付補遺) [調査報告書]. 熊本県環境公害部環境保全課.
 176. 熊本県教育委員会 (1985) 特別天然記念物カモシカ生息分布調査報告書. 熊本県文化財調査報告, (71) : 1-86.
 177. 熊本県教育委員会 (1998) 黒橋貝塚出土の哺乳類遺体. 黒橋貝塚—浜戸川中小河川

- 改良事業に伴う埋蔵文化財の調査－. 熊本県文化財調査報告 (166) , 263-275.
178. 熊本県教育委員会文化課 (1983) 昭和 57 年度特別天然記念物ニホンカモシカに関する調査報告書. pp. 51-57.
 179. 熊本県教育会葦北郡支会 (1926) 葦北郡誌.
 180. 熊本県教育会阿蘇郡支会 (1926) 阿蘇郡誌.
 181. 熊本県教育会球磨郡教育支会 (1941) 球磨郡誌.
 182. 熊本県教育会八代郡支会 (1927) 八代郡誌.
 183. 熊本日日新聞情報文化センター (1995) くまもと自然大百科. 熊本日日新聞社.
 184. 熊本市 (1917) 熊本市誌.
 185. 熊本市 (1998) 新熊本市誌. 通史編. 自然. 原始・古代. 1 : 171-307.
 186. 熊本野生生物研究会 (編) (2015) くまもとの哺乳類. 東海大学出版部. 303pp.
 187. 栗原智昭 (2010) 九州における 2000 年以降のクマ類の目撃事例. 哺乳類科学, 50:187-193.
 188. 黒田長禮 (1940) 原色日本哺乳類図説. 三省堂.
 189. 黒田長禮 (1948) 日本の獣. 文祥堂.
 190. 黒田長禮 (1953) 日本獣類図説. 創元社.
 191. 黒田長禮 (1979a) あなぐま. 新編日本動物図鑑. 北隆館.
 192. 黒田長禮 (1979b) かもしか. 新編日本動物図鑑. 北隆館.
 193. 九州産業交通株式会社 (1958) 阿蘇山の動植物. 阿蘇山と湯の谷温泉. pp. 91-135.
 194. 前田喜四雄 (1996) 日本産翼手目 (コウモリ類) の分類レビューと解説. 哺乳類科学, 36 (1) : 1-23.
 195. 前田喜四雄 (1997) 日本産翼手目 (コウモリ類) の和名再検討. 哺乳類科学, 36 (2) : 237-256.
 196. 前田喜四雄 (2001) 日本コウモリ研究誌. 東京大学出版会. pp. 203.
 197. 松尾公則 (2010) 長崎県の哺乳類. 長崎新聞社. 173pp.
 198. 免田隆大・安田雅俊 (2012) 九州山地の哺乳類糞塊から採取された糞虫について. 熊本野生生物研究会誌, 7 : 41-42.
 199. 湊秋作 (1986) ニホンヤマネの生態. 動物大百科 5. 平凡社. pp. 96-97.
 200. 三浦慎悟 (2001) 日本産大型哺乳類の生活史からみた保全・管理の戦略. 生物科学, 52:217-227.
 201. Miyabe, S., A. Miyamoto, Y. Yokohata and M. Yasuda (2016) Gastrointestinal parasitic helminth fauna of the Pallas' s squirrel (*Callosciurus erythraeus*) from the Uto Peninsula, Kumamoto, Kyushu, Japan and analyses of the abundance of an alien nematode, *Strongyloides callosciureus*. Jpn. J. Zoo. Wildl. Med., 21:29-34.
 202. 宮島淳二・草野静代 (2003) 熊本県におけるシカ被害の実態. 九州森林研究, 56:222-224.
 203. 宮崎県版レッドデータブック作成検討委員会 (2015). 2015 年度版宮崎県版レッドリスト. <https://www.pref.miyazaki.lg.jp/shizen/kurashi/shizen/page00193.html> (2018 年 6 月 30 日参照)
 204. 森田祐介 (2015) 黒岳山麓における樹上性哺乳類の生息状況. Bungoensis, 1:24-29.

205. Mori, T., S. Arai, S. Shiraishi and T. A. Uchida (1991) Ultrastructural observation on spermatozoa of the Soricidae, with special attention to a subfamily revision of the Japanese water shrew *Chimarrogale himalaya*. J. Mamm. Soc. Japan, 16:1-12.
206. 村田育恵・井上幸子・矢部恒晶・壁村勇二・鍛冶清弘・久保田勝義・馬淵哲也・椎葉康喜・内海泰弘 (2009) 九州大学宮崎演習林におけるニホンジカの生息密度と下層植生の変遷. 九州大学農学部演習林報告, 90:13-24.
207. 本川雅治 (編) 日本のネズミ. 東京大学出版会. 241pp.
208. 長峰智 (2012) 水俣市における自動撮影装置による哺乳類の確認. 熊本野生生物研究会誌, 7:43-44.
209. 長峰智・安田雅俊・坂田拓司 (2010) 18世紀中葉の毛介綺煥に描かれたヤマネ *Glirulus japonicus* の産地の特定. 熊本野生生物研究会誌, 6:29-32.
210. 長峰智・安田雅俊・坂田拓司 (2015) 江戸時代の図譜『毛介綺煥』に描かれたヤマネ *Glirulus japonicus* の産地における生息の確認の意義. 熊本野生生物研究会誌, 8:11-14.
211. 永井善登 (1936) 本縣に於ける動物の地方名調査. 郷土の総合的研究. 1. 熊本縣女子師範學校. pp. 127-129.
212. 長崎県 (2001) ながさきの希少な野生動植物—レッドデータブック 2001—. 長崎県民生活環境自然保護課. 568pp.
213. 長尾圭祐・坂田拓司 (1993) 泉村の哺乳類目録. 泉村の自然—資料編—. 五家荘の会.
214. 永田瑞穂 (1976) 熊本のニホンカモシカ. 九州沖縄の生きものたち. 第3集. 西日本新聞社. pp. 128-129.
215. 中島福男 (1996) ヤマネ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 1. 平凡社. pp. 88-91.
216. 中島福男 (2001) 日本のヤマネ. 信濃毎日新聞社.
217. 中島福男 (2006) 日本のヤマネ [改訂版]. 信濃毎日新聞社. 179pp.
218. 中島茂・清水薫 (1948) 暖地の動物学. 文華堂.
219. 中武雅周 (1955) 郷土の見学と採集. 宮崎県理科教育協会.
220. 中園匡英 (1995) 畜産及び野生獣調査「熊本県公文類纂」「明治三十五年 畜産」より. 部落解放研究くまもと, (29):60-72.
221. 中園敏之 (1968) キュウシュウムササビの採集記録. 哺乳動物学雑誌, 4 (2): 43.
222. 中園敏之 (1970a) 九州におけるホンドギツネの巣穴について. 1. 巣穴とその分布状態. 哺乳動物学雑誌, 5 (1): 1-7.
223. 中園敏之 (1970b) 九州におけるホンドギツネの巣穴について. 2. 巣穴の構造 4 例. 哺乳動物学雑誌, 5 (2): 45-49.
224. 中園敏之 (1972a) 内大臣溪谷における哺乳類の生息状況. 内大臣学術調査報告書. 矢部町教育委員会. pp. 11-12.
225. 中園敏之 (1972b) 野ギツネ母子の生活. 新評, 6: 244-253.
226. 中園敏之 (1973) 阿蘇のキツネ. 学習研究社.
227. 中園敏之 (1975a) 奥阿蘇の原野に棲むキツネの生態. 九州沖縄の生きものたち第2集. 西日本新聞社. pp. 93-128.

228. 中園敏之 (1975b) キツネの社会構造を探る. 季刊アニマ Winter. 平凡社. 75 : 69-80.
229. 中園敏之 (1977) 熊本の哺乳類. 中・大型哺乳類の生息分布. 熊本の自然 (日本生物教育会第 32 回全国大会記念誌) . pp. 49-52.
230. Nakazono T. (1987) The distribution and the use by the red fox *Vulpes vulpes japonica* in Kyushu. Ecol. Res., 2 : 265-277.
231. 中園敏之 (1989) 九州におけるホンドギツネのハビタット利用パターン. 哺乳類科学, 29 (1) : 51-62.
232. 中園敏之 (1990a) 阿蘇郡蘇陽町馬見原に滞在したヒトリザルの生活場所と行動パターン. VULPES, 10 (2) : 1-7.
233. 中園敏之 (1990b) 日本の里山をふるさとにして. ホンドギツネが好む環境を探る. アニマ, (210) : 12-18.
234. 中園敏之 (1991) 矢部周辺県立自然公園とその周辺における鳥相・哺乳類相. 熊本野生動物研究会誌, 1 : 1-17.
235. 中園敏之 (1996a) ホンドギツネ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 1. 平社. pp. 122-123.
236. 中園敏之 (1996b) 蘇陽町脊椎動物目録. 蘇陽町誌. 自然編. pp. 445-470.
237. 中園敏之 (2009) 熊本県産哺乳類の外部形態計測データ集. その 1. 熊本野生生物研究会誌, 5 : 37-42.
238. 中園敏之・荒井秋晴・高添清・歌岡宏信・坂田拓司・松浦弘 (1999) 熊本県におけるニホンイタチとチョウセンイタチの分布. 日本動物学会・日本植物学会・日本生態学会九州支部 (地区) 合同大会講演要旨集. 34.
239. 中園敏之・藤吉勇治・歌岡宏信・松岡秀樹・長野清・土屋公幸 (1988) 白髪岳自然環境保全地域及び周辺地域における哺乳類の生息状況. 白髪岳自然環境保全地域報告書. 環境庁自然保護局. pp. 89-112.
240. 中園敏之・高野茂樹・長野清・歌岡宏信・松岡秀樹・藤吉勇治・長尾圭祐・坂本真理子・中富尚士・鎌賀厚次 (1996) 阿蘇南外輪山駒返峠周辺の哺乳類. 熊本野生動物研究会誌, 2 : 39-47.
241. 日本哺乳類学会 (編) (1997) レッドデータ日本の哺乳類. 文一総合出版. 東京.
242. 日本野生生物研究センター (1981) 中・大型哺乳類 8 種の分布図 - 第 2 回自然環境保全基礎調査動物分布調査の結果から. 野生, (6) : 1-15.
243. ニホンザルの現況研究会 (1978) 九州地方のニホンザルの分布. にほんざる, (4) : 47-48.
244. 西岡鉄夫 (編) (1974) 熊本の動物. 熊本の風土とこころ (2) . 熊本日日新聞社.
245. 西岡鉄夫 (編) (1980) 熊本の天然記念物. 熊本の風土とこころ第二集 (22) . 熊本日日新聞社.
246. 仁科邦男 (1978) 九州動物紀行. 葦書房.
247. 農林省林業試験場九州支場 (1977) 三十年のあゆみ. 242pp.
248. 小原巖 (1968) 日本産肉食類 4 種の乳頭式について. 哺乳動物学雑誌, 4 (2) : 55-56.
249. 落合啓二 (2016) ニホンカモシカ : 行動と生態. 東京大学出版会. 290pp.
250. 小田文弘 (1982) 宇土半島の中・大型哺乳類一人里における種生態. 宇土半島自然と文化 II . pp. 113-123.
251. 小田文弘 (1987) 三角の哺乳類. 三角町史 - 三角町の自然. 三角町史編纂協議会専

- 門委員会編. 三角町役場. pp. 48-51.
252. 小田文弘 (2003) 宇土市の陸生哺乳類目録. 宇土の自然. 新宇土市史基礎資料, (10) 宇土市教育委員会. pp. 75-77.
253. Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui, and T. Saitoh, (eds.) (2015) The Wild Mammals of Japan. Second edition. Shoukadoh Book Sellers and the Mammal Society of Japan. 506pp.
254. 大西尚樹・安河内彦輝 (2010) 九州で最後に捕獲されたツキノワグマの起源. 哺乳類科学, 50:177-180.
255. 大野愛子・安田雅俊・井上昭夫 (2010) 菊池溪谷の野生哺乳類—吉倉・荒井 (1982) の調査から 30 年後の状況—. 熊本野生生物研究会誌, 6: 1-12.
256. 大野愛子・安田雅俊・井上昭夫 (2011) ヤマネ *Glirulus japonicus* の捕獲法の検討と日内休眠の観察. 九州森林研究, 64:69-71.
257. 岡村祐隆・小原巖 (1969) 天草諸島下島より新記録のホンドテン. 哺乳動物学雑誌, 4 (4, 5, 6): 162.
258. 岡崎弘幸 (2004) ムササビに会いたい! 晶文社. 151pp.
259. 小野勇一 (1976) 九州のニホンカモシカ過去, 現在, 未来. 九州沖縄の生きものたち第 3 集. 西日本新聞社. 133pp.
260. 小野勇一 (2000) ニホンカモシカのたどった道—野生動物との共存を探る. 中央公論新社. 184pp.
261. 小野勇一・中園敏之 (1971) キツネの生態. 動物と自然, 1 (9): 6-9.
262. 大分県自然環境学術調査会野生生物専門部会 (2011). レッドデータブックおおい 2011—大分県の絶滅のおそれのある野生生物—. <http://www.pref.oita.jp/10550/reddata2011/reddata2011/reddatabook.html> (2018 年 6 月 30 日参照)
263. 大分・熊本・宮崎県教育委員会 (1989) 昭和 62・63 年度九州山地カモシカ特別調査報告書. 123pp.
264. 大分・熊本・宮崎県教育委員会 (1996) 平成 6・7 年度九州山地カモシカ特別調査報告書. 熊本県文化財調査報告書第 156 集. 145pp.
265. 大分・熊本・宮崎県教育委員会 (2004) 平成 14・15 年度九州山地カモシカ特別調査報告書. 156pp.
266. 大分・熊本・宮崎県教育委員会 (2012) 平成 23・24 年度九州山地カモシカ特別調査報告書. 141pp.
267. 大田眞也 (1991) 自然環境, 動物. 河内町史, 通史編上. pp. 107-140.
268. 佐賀県 (2003) 佐賀県レッドデータリスト 2003 年版. 佐賀県環境生活局. 60pp.
269. 坂田拓司 (2005) 熊本県白髪岳における小型哺乳類捕獲調査及びブナ結実に関する調査. 熊本野生生物研究会誌, 4: 25-33.
270. 坂田拓司 (2005) 泉村の哺乳類. 泉村の自然. pp. 61-70.
271. 坂田拓司 (2010) 熊本県におけるコウモリ類に関する生息調査報告 (I). 熊本野生生物研究会誌, 6: 43-49.
272. 坂田拓司 (2012) 熊本県宇土半島のクリハラリスを題材にした授業—外来生物問題と解剖実習. 熊本野生生物研究会誌, 7: 47-55.

273. 坂田拓司・中園敏之・長野清・高野茂樹・松岡秀樹・歌岡宏信・田尻真理子・坂梨仁彦・藤吉勇治・長尾圭祐・田畑清霧・田代周史・天野守哉・浦中恵介・清水奈緒美・鎌賀厚次 (1992) 牛深市大島における野生化したカイウサギの生態研究. 熊本野生動物研究会誌, 1 : 27-33.
274. 坂田拓司・歌岡宏信・長野清・中園敏之 (2002) 熊本県の貴重な野生動植物が生息・生育する地域における哺乳類. 熊本野生生物研究会誌, 3 : 11-16.
275. 坂田拓司・安田雅俊・長峰智 (2010) 熊本県水俣市大川におけるニホンモモンガ *Pteromys momonga* とヤマネ *Glirulus japonicus* の確認. 熊本野生生物研究会誌, 6 : 23-28.
276. 坂田拓司・安田雅俊・中園敏之 (2011) 熊本県内の樹上性齧歯類を対象とした巣箱調査と巣箱自動撮影調査. リスとムササビ, 26:8-12.
277. 坂田拓司・安田雅俊・中園敏之 (2012) 八代市竜峰山周辺における樹上性哺乳類の生息状況. 熊本野生生物研究会誌, 7 : 17-24.
278. 坂田拓司・安田雅俊・天野守哉・田上弘隆・免田隆大・岩佐真宏 (2015) 阿蘇中央火口丘における小型哺乳類の捕獲. 熊本野生生物研究会誌, 8 : 33-36.
279. 佐々木浩 (1996) ニホンイタチとチョウセンイタチ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 I. 平凡社. pp. 128-131.
280. 佐野明 (2007) 森林性コウモリのねぐらに関する最近の知見. 林業と薬剤, 182:6-10.
281. 沢田勇 (1972) 洞くつ棲コウモリと寄生条虫. 土龍, (3) : 33-35.
282. 沢田勇 (1974) 日本産コウモリの条虫類. 動物学雑誌, 33 (4) : 327.
283. 杉山昌典・門脇正史 (2014) インターネットを活用したヤマネ *Glirulus japonicus* の全国調査. 哺乳類科学, 54:269-277.
284. 高野茂樹 (1992) 市房山における植生とカモシカ生息について. 熊本野生動物研究会誌, 1 : 23-26.
285. 竹下完 (1964a) 野生ニホンザルの分布及びポピュレーション (上). 野猿, (19) : 6-13.
286. 竹下完 (1964b) 野生ニホンザルの分布及びポピュレーション (下). 野猿, (20-21) : 12-21.
287. 玉名郡役所 (1923) 玉名郡誌.
288. 田村典子 (2011) リスの生態学. 東京大学出版会. 211pp.
289. 立石隆・吉田博一 (1989) 宮崎県田野町と椎葉村における小哺乳類の分布. 生物福岡, (29) : 1-5.
290. Temminck, C. J. (1844-1850) Siebold Fauna Japonica. Mammiferes.
291. Thomas, O. (1906) The Duke of Bedford's zoological exploration in Eastern Asia. I. List of mammals obtained by Mr. M. P. Anderson in Japan. P. Z. S. London. 1905, 2 : 331-363.
292. 常田邦彦 (2007) カモシカ保護管理の四半世紀—文化財行政と鳥獣行政—. 哺乳類科学, 47:139-142.
293. 東矢力也 (1997) 動物. 西合志町史, 通史編, 第1編自然環境. pp. 100-106.
294. 土屋公幸 (1974) 日本産アカネズミ類の細胞学のおよび生化学的研究. 哺乳動物学雑誌, 6 (2) : 67-87.

295. 内田照章・吉田博一 (1968) 九州のヒメヒミズ *Dymecodon pilirostris* True, とくに分布と形態について. 哺乳類科学, 16 : 17-26.
296. 上田浩一・安田雅俊 (2016) 五島列島におけるカワウソの分布と絶滅. 哺乳類科学, 56:151-157.
297. 宇田川竜男 (1969) 阿蘇山のハタネズミ異常発生について. 森林防疫, 18 : 2-6.
298. 宇田川竜男 (1971) 阿蘇・久住山系のネズミ異常発生. 暖帯林, (294) : 108-114.
299. 宇土郡役所 (1921) 宇土郡誌.
300. 矢部恒晶 (2007) 九州におけるニホンジカ特定鳥獣保護管理計画の現況. 哺乳類科学, 47:55-63.
301. 矢部恒晶・小泉透・遠藤晃・関伸一・三浦由洋 (2001) 九州中央山地におけるニホンジカのホームレンジ. 九州森林研究, 54:131-132.
302. 矢部恒晶・當房こず枝・吉山桂代・小泉透 (2007) 九州山地の落葉広葉樹林帯におけるニホンジカの胃内容. 九州森林研究, 60:99-100.
303. 山田文雄 (2017) ウサギ学：隠れることと逃げることの生物学. 東京大学出版会. 270pp.
304. 山田文雄・池田透・小倉剛 (編) (2011) 日本の外来哺乳類. 管理戦略と生態系保全. 東京大学出版会. 439pp.
305. 山口迪 (1976) 背梁山地のニホンカモシカ. 九州沖縄の生きものたち第3集. 西日本新聞社. pp. 107-127.
306. 柳川久 (1996) エゾモモンガとニホンモモンガ. 日本動物大百科 1. 哺乳類 1. 平凡社. pp. 84-87.
307. 柳瀬聡規 (1969) 熊本県におけるノネズミの異常発生と防除対策について. 森林防疫, 18 : 10-12.
308. 安田雅俊 (2006) 九州地方のニホンリスについて. リスとムササビ. 18 : 14-16.
309. 安田雅俊 (2007a) 絶滅のおそれのある九州のニホンリス, ニホンモモンガおよびムササビ—過去の生息記録と現状および課題—. 哺乳類科学, 47 (2) : 195-206.
310. 安田雅俊 (2007b) 哺乳類. 山鹿市自然環境調査報告書. 山鹿市自然環境調査研究会. pp. 4-1-17.
311. 安田雅俊 (2008a) 宮崎県の狩猟関係資料にみる幻のニホンリス. みやざき民俗, 60 : 96-99.
312. 安田雅俊 (2008b) 速報：雁俣山でニホンモモンガを確認. 熊本野生生物研究会機関誌, 23(4) : 1.
313. 安田雅俊 (2010a) 熊本県宇土半島で野生化したクリハラリス. リスとムササビ, 24 : 2-6.
314. 安田雅俊 (2010b) 九州・沖縄地方において絶滅のおそれのある哺乳類. 森林総合研究所九州支所年報, 22 : 22-23.
315. 安田雅俊 (2011) 中九州の哺乳類相の特徴. 九州森林研究, 64 : 26-29.
316. 安田雅俊 (2012) 立田山に生息する哺乳類. 森林総合研究所九州支所年報, 24 : 24-25.
317. 安田雅俊 (2014) クリハラリスの環境影響評価と防除. リスとムササビ, 32:11-14.
318. 安田雅俊 (2015) 熊本県天草諸島の陸生哺乳類. 熊本野生生物研究会誌, 8:1-6.
319. 安田雅俊 (2017a) 公的データベースに登録された九州のアライグマの生息記録の

- 特徴. 森林総合研究所九州支所年報, 28:16-17.
320. 安田雅俊 (2017b) 九州に定着した特定外来生物クリハラリスの由来と防除. 森林野生動物研究会誌, 42:49-54.
321. 安田雅俊 (2017c) 大分県西部と中央部におけるヤマネの生息調査. *Bungoensis*, 2: 45-48.
322. 安田雅俊・天野守哉 (2011) 熊本県宇土半島におけるクリハラリスの防除活動について. *リスとムササビ*, 26:26-27.
323. 安田雅俊・天野守哉 (2012) 熊本県宇土半島におけるクリハラリス *Callosciurus erythraeus* の捕食者. 熊本県野生生物研究会誌, 7:29-32.
324. 安田雅俊・天野守哉 (2015) 熊本県におけるヒメヒミズ *Dymecodon pilirostris* の捕獲. 熊本県野生生物研究会誌, 8:7-10.
325. 安田雅俊・天野守哉・坂田拓司・中園敏之・田上弘隆 (2010) 熊本県宇土半島におけるクリハラリス *Callosciurus erythraeus* の繁殖状況 (2009年5月~2010年5月). 熊本野生生物研究会誌, 6: 39-41.
326. 安田雅俊・天野守哉・坂田拓司・中園敏之・田上弘隆・馬場稔 (2012) 熊本県宇土半島におけるクリハラリス *Callosciurus erythraeus* の繁殖状況 (2010年3月~2012年2月). 熊本野生生物研究会誌, 7: 13-16.
327. 安田雅俊・船越公威・南尚志 (2015) 九州南部で観察された冬期におけるヤマネの活動. *哺乳類科学*, 55:21-25.
328. 安田雅俊・古家明敏・藤原佐保子 (2009) 熊本県山鹿市における哺乳類の分布. 熊本野生生物研究会誌, 5:1-9.
329. 安田雅俊・近藤洋史 (2010) 明治初期の熊本県南部における野生哺乳類の生息, 狩猟および被害の分布. *森林防疫*, 59 (2): 23-30.
330. 安田雅俊・栗原智昭 (2009) 自動撮影カメラで記録された宮崎県椎葉村のニホンモモンガ. 熊本野生生物研究会誌, 5: 31-35.
331. 安田雅俊・栗原智昭・緒方俊輔 (2012) 宮崎県北部におけるカモシカの生息記録と分布の特徴. *哺乳類科学*, 52:41-45.
332. 安田雅俊・松尾公則 (2012) 長崎県島原半島でみつけた外来リス類とその系譜. *リスとムササビ*, 28:18-19.
333. 安田雅俊・松尾公則 (2015) 巣箱自動撮影法であきらかになった九州北部の照葉樹林におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の活動周期. *哺乳類科学*, 55:35-41.
334. 安田雅俊・大野愛子・井上昭夫 (2012) 菊池溪谷の文献資料. 熊本野生生物研究会誌, 7: 45-46.
335. 安田雅俊・大野愛子・井上昭夫・岩佐真宏 (2010) 熊本県におけるスミスネズミ *Eothenomys smithii* の捕獲. 熊本野生生物研究会誌, 6: 33-38.
336. 安田雅俊・大野愛子・井上昭夫・坂田拓司 (2012) 熊本県におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の分布. 熊本野生生物研究会誌, 7: 26-28.
337. 安田雅俊・坂田拓司 (2011) 絶滅のおそれのある九州のヤマネ—過去の生息記録からみた分布と生態および保全上の課題—*哺乳類科学*, 51:287-296.
338. 安田雅俊・上田明良 (2015) 阿蘇北外輪山におけるピットフォールトラップによる小型哺乳類の捕獲記録. 熊本野生生物研究会誌, 8:29-32.

339. 安田雅俊・上田浩一（2016）九州の島嶼における中型哺乳類相の復元．九州森林研究，69:119-120.
340. 安田雅俊・八代田千鶴・栗原智昭（2015）自動撮影法による九州におけるカモシカの新たな生息地の確認．九州森林研究，68:133-134.
341. 安田雅俊・八代田千鶴・栗原智昭・安田晶子・安田樹生・沼田真也（2015）電気伝導率からみた九州の環境水の特徴—スイス，イタリア，マレーシアとの比較—．熊本野生生物研究会誌，8:21-27.
342. 安田雅俊・八代田千鶴・坂田拓司・栗原智昭・緒方俊輔（2015）自動撮影カメラによるカモシカの定点調査：熊本県高森町下切の事例．熊本野生生物研究会誌，8:15-17.
343. 八代田千鶴・安田雅俊（2012）熊本県内大臣におけるカモシカ *Capricornis crispus* の自動撮影カメラによる生息確認．熊本野生生物研究会誌，7:37-39.
344. 吉倉眞（1968）熊本県南帯区山地の動物．自然公園調査概要書．熊本県観光課. pp. 1-8.
345. 吉倉眞（1969a）人吉，球磨，五木，五家荘地区の動物相について．熊本県人吉球磨五木五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書. pp. 67-68.
346. 吉倉眞（1969b）人吉，球磨，五木，五家荘地区の鳥獣類．熊本県人吉球磨五木五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書. pp. 68-105.
347. 吉倉眞（1969c）注目すべき県産小獣．自然と文化を愛する会・会報，69:10-12.
348. 吉倉眞（1972）南阿蘇登山道計画が動物に及ぼす影響について（謄写）．熊本県企業局. 5pp.
349. 吉倉眞（1974）北向山鳥獣調査報告．白川ダム建設が北向山天然林に及ぼす影響の調査（最終報告）．熊本県自然保護課. 45pp.
350. 吉倉眞（1977）阿蘇の動物（脊椎動物）．阿蘇国立公園学術調査報告書．熊本県. pp. 35-69.
351. 吉倉眞（1978）天草の哺乳類．CALANUS, (6):1-9.
352. 吉倉眞（1979a）天草諸島産陸棲哺乳動物．天草地方と長崎県南部の哺乳類・鳥類の生息状況調査報告書．西日本技術開発株式会社. pp. 3-9.
353. 吉倉眞（1979b）五木を中心とする九州山地の動物概況．川辺川流域総合予備調査報告．川辺川流域総合予備調査団. pp. 21-30.
354. 吉倉眞（1981）小岱山とその付近の哺乳動物．小岱山県立公園計画の再検討に関する調査報告書．熊本開発研究センター. pp. 17-20.
355. 吉倉眞（1982a）哺乳動物．金峰山公園計画再検討調査報告書．熊本開発研究センター. pp. 37-47.
356. 吉倉眞（1982b）熊本の野生動物．放送（テレビ）による熊本大学公開講座．熊本の自然（熊本大学）テキスト. pp. 151-164.
357. 吉倉眞（1984a）哺乳動物．熊本市自然環境調査報告書（謄写）．熊本開発研究センター. pp. 42-48.
358. 吉倉眞（1984b）熊本の陸生哺乳動物（1）研究史と陸生哺乳動物目録．土龍，(11):27-55.
359. 吉倉眞（1985）芦北海岸県立自然公園およびその周辺の哺乳動物．芦北海岸県立自然公園計画再検討調査報告書（謄写）．熊本県開発研究センター. pp. 84-97.

360. 吉倉眞 (1988) 熊本の陸生哺乳動物 (2) 分布と実態. 土龍, (13) : 100-117.
361. 吉倉眞 (1993) 熊本県の動物. 熊本市立博物館 : 47.
362. 吉倉眞・荒井秋晴 (1978) 哺乳類調査. 迫間川流域の自然環境調査. 熊本洞穴研究会, pp. 113-135.
363. 吉倉眞・荒井秋晴 (1982) 菊池溪谷の哺乳類. 菊池溪谷の動物. 熊本洞穴研究会. pp. 11-17.
364. 吉倉眞・林敏雄 (1973) 北向山の鳥獣. 白川ダム建設が北向山天然林に及ぼす影響の調査 (中間報告). 熊本県自然保護課. pp. 3-10.
365. Yoshiyuki, M. (1989) A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. Nat. Sci. Mus., Tokyo, 242pp.